

翻訳と憑依 あるいは、翻訳の骨折と骨折の翻訳

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学 稲賀 繁美

文学の越境には翻訳作業が不可欠だろう。だが欧米で展開されている現在の翻訳学の理論からは、いくつか重要な視点が欠落しているように見受けられる。本発表ではそのうち、一方では憑依現象と翻訳との関係、他方では翻訳と骨折という話題についていささか考察してみたい。

2 番目の話題を先に敷衍するなら、翻訳には骨折が不可欠だが、その事実は多くの翻訳理論からは見落とされている。単純な話だが、欧米語を日本語に翻訳すれば語順は容易に転倒する。言い換えれば、原語では先に登場する語彙が和訳では後になってはじめて読み取られる。この転倒からだけでも容易に理解の水準で骨折現象が多発している。否、この骨折なくしては、そもそも翻訳は成立しない。だがそうだとすれば、そこに表明された骨折はいかに翻訳に耐えうるのか。それとも翻訳とはこうした骨折を、あたかも存在しなかったがごとくに隠蔽する技術なのだろうか。

ここで最初の問いに戻りたい。すなわち翻訳と憑依の関係である。ともすれば翻訳とは原語の等価物と見なされる複製を異言語で紡ぎ出す営みと理解される。だが原語というオリジナルの複製としての翻訳という理解ははたして妥当なのだろうか。オリジナルとコピーというパラダイムで翻訳を理解することそのものに問題はないのだろうか。そして翻訳とは二次的派生物、複製品という見方からは、翻訳の重要な契機が見落とされているのではないだろうか。それこそ憑依による転生という契機である。

翻訳によって骨折を必然の契機として営まれる跳躍は、言語のあいだに架された橋の下にひろがる隙間、底なしの谷間を望見させる。だがその裂け目からこそ魂の憑依へのモメントが生まれるのではなかったか。本発表はそうした見地から翻訳論の刷新を試みる。